

第33号

昭和62年 5 月31 日

群馬県山岳連盟

前橋市大手町1丁目1-1

(0272)23-1111

群馬県庁観光課内

群馬県連盟編集委員会

責任者 羽野順一

印刷所 森田印刷

定価 1部 100円

国体山岳競技を統計にして

常任理事・事務局長

女屋等志



国体山岳競技は、競技コースやルートで練習が豊富にできるため開催県が毎年優勝している。また開催県をとりまく県が競技会場に近距離にあるため、上位入賞しているケースが多い。開催県に有利にできている競技であると思う。

昭和五十五年第三十五回栃木国体から天皇杯、皇后杯の得点競技としてスタートして七回開催された大会で、統計の数値からその成績や得点などを集計して、面白いことが発見できたので、これを分析してみたいと思います。

○ 成年男子種別の入賞確率が高いC隊
成年男子は各都道府県一チームが参加できることから四十六チームを山岳競技規則の競技日程及びコース基準により三隊に編成している。縦走競技から開始するA隊と中二日間を縦走競技するB隊、最後の二日間を縦走競技するC隊の中で、どの隊が入賞確率が高いかと、七回の国体からベスト八位のチーム数を見ると別表の通りとなります。A隊は一位三、二位二、三位一、以下八位まで十四チームB隊は一位一、二位一、三位四、以下八位まで十二チーム。これに

A隊は縦走競技二日間の後、二日間を登山競技と踏査競技を行うが、縦走競技で体力をかなり消耗し、特に登山競技においては、疲れてた身体では登山力も落ちるのが当然である。C隊と比較して不利なことが分かります。ただ、A隊でも競技日程が、縦走競技二日間の後、登山競技、踏査競技の順に行った大会では、高順位のチームが出たり、入賞チーム数が多い出ています。登山競技の日に、縦走競技の疲労回復と体力調整ができたのではないかと思います。

入賞率の低いB隊は、競技展開が他の隊と比較して、難しいことにあると思います。特にA、C隊では、競技中に疲労回復と体力調整が若干行うことができるが、この隊は中二日間が縦走競技であり、最終日の競技が登山にしろ、踏査にしろ、調整する時間が取れないことが、他の二つの隊より不利であると思う。この隊の特長として、最後の種目が踏査競技の場合、入賞チームの比較で踏査競技の得点が高い結果が現れている。

○ スタート順と入賞率になにか関係がある
不明の連、不運がある
スタート順と入賞率になにか関係がある
成年男子の登山競技のベスト八位をみると、一番から五番、十一番から最終番の入賞率と同じで三十五パーセントであった。その中で一位から三位のチームは、一番から五番スタートが四十四パーセントを占めている。特に二番、四番、五番、十番、十三番スタートが一位から三位に多い。踏査競技では一番から五番の入賞率が四十分パーセント、十一番から最終番が三十三パーセント、六番から十番が二十七パーセントであった。一位から三位のチームでは一番から五番が四十四パーセント、六番から十番が三十三パーセント、十一番から最終番が二十七パーセント。少年女子は各々が同じ数値で三分の一であった。ところが、一位から三位のチームの数値では、一番から五番スタートが入賞率五十パーセントを占めている。二番、三番、五番スタートが一位から三位に多い。

○ 開催県が所属するブロックと隣接県の入賞率が高い
このことは冒頭で触れましたが、各大会の四種別の入賞チーム数を合計すると、三十五回栃木大会では六チーム、三十六回滋賀大会では五チーム、三十七回鳥根大会では三チーム、三十八回群馬大会では十一チーム、三十九回奈良大会では六チーム、四十回鳥根大会では五チーム、四十一回山梨大会では十一チームであった。関東ブロックでは三回開催されたが、三十八回群馬大会と四十一回山梨大会では十一チームもあった。各大会の種別では、開催県が所属するブロックや隣接県から二位または三位のチームが多く出ているし、種別で開催県を破って一位となったチームは、圧倒的に開催県が所属するブロックから出ている。このことから、開催県と開催県の所属するブロックに有利にできている競技であるといわれる結果でもある。

最後に、まだ七回のデータを基にしての統計のため十分なこととは確かであるが、山岳競技にも何か成年男子の隊編成やスタート順が持つ運、不運があるように思います。

成年男子種別入賞一覧											
大会	順位	入賞	大会	順位	入賞	大会	順位	入賞	大会	順位	入賞
A	35	1 5 8	B	35	3 4	C	35	2 6 7	A	36	7 8
A	36	3 4	B	36	1 5	C	36	2 6 7	A	37	5 6
A	37	7	B	37	4 8	C	37	1 4 6	A	38	7 8
A	38	5	B	38	2 3	C	38	1 4 6	A	39	7 8
A	39	1 8	B	39	3	C	39	2 4 5	A	40	6 7
A	40	1 2 6	B	40	5	C	40	3 4 7	A	41	6 8
A	41	2 4	B	41	3 7	C	41	1 5 6			
		14			12			30			

群馬県山岳連盟に関する 書籍『ロープと考察』

理事長 田中成幸

はじめに

私の本棚の隅に、古いノートが二冊ある。私が山を登りはじめてからの山行記録と、群馬県山岳連盟に關係のあった人達の、遭難の記録である。ヒマラヤ8000米のクロニクルとか、輝かしい初登攀のクロニクルなどを、集めたり発表するのは楽しいが、遭難のクロニクルは、あまり気持ちのいいものではない。書くことで死者を鞭打つ様な気がするからである。しかし、この記録を読んだ人達が、少しでも事故の原因や、季節、場所などを考えて、これからの自分の山行時に役立てる事があるようなら、発表する甲斐があるというものである。中には、私自身の關係するものもあったり、親しい友人も出て来て、書いていてペンの止まることも度々あった。私自身も、紙一重でこの欄に書かれる様なこともあったし、山登りを続けて行くかぎり、危険をいかに排除するか、いつも念頭におかなければならない。

今回のクロニクルが、昭和30年代から始まっているのは、日本隊のマナスル登山が成功し、登山ブームとなり、事故が急増したと、群馬岳連の基盤が固まりつつあったこと、私自身本格的な登

遭難クロニクル表

年月日	時	氏名	年齢	遭難場所	原因	所属山岳会
31. 5. 3	11:00	佐川 昭雄	22	谷川岳マチガ沢分岐	ブロッコ岩壁を受けテラスに転落	群馬山岳会
31. 5. 3	12:00	山田 芳正	17	谷川岳マチガ沢分岐	雪崩	伊勢崎山岳会
31. 11. 3	10:30	中野 達夫	28	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	前橋山岳会
32. 5. 20	14:10	戸川 昭雄	27	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
32. 8. 19	13:30	山田 芳正	27	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
32. 8. 29	13:30	山田 芳正	27	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
35. 11. 19	13:00	新井 隆夫	32	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
36. 8. 26	13:00	井上 重吉	23	谷川岳マチガ沢分岐	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
38. 1. 3	9:55	山田 芳正	21	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
40. 9. 5	13:45	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
41. 9. 17		山田 芳正	24	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
42. 1. 1	8:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
42. 1. 1	13:55	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
42. 2. 19	15:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
42. 7. 30		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
43. 8. 25	14:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
45. 2. 11	17:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
45. 8. 9	13:15	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
45. 8. 10	11:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
45. 9. 6	10:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
47. 5. 3	16:20	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
48. 7. 17		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
48. 11. 4		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
49. 12. 30	10:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
50. 1. 4	9:40	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
51. 12. 31	19:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
52. 1. 2	7:30	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
52. 12. 10	11:50	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
53. 1. 5	17:30	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
53. 9. 23		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
53. 10. 20		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
55. 5. 2		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
57. 8. 1	14:00	山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会
59. 9. 1		山田 芳正	22	谷川岳一の倉沢4ルンゼ	崖壁登攀中、転落	群馬山岳会

※ 群馬山岳会には上欄支部

主な遭難の説明
昭和31年5月3日、群馬山岳部、佐川君は、谷川岳マチガ沢でブロッコ岩壁に落ちて落ちる。救助に地元水上、沼田山岳会、岳連有志が出動、5月17日遺体搬出。

5月5日、伊勢崎工業、川田君は湯横川旧道ケサ沢沢出合にて、水を汲みに行き、シェルトに落ちて死亡、高校生としては、はじめて11月3日、前橋高校、中神君は、谷川岳一の倉沢馬帽子岩壁を単独で登攀中転落死、高校生で、当時の谷川岳では一番のワリエーシオンを、単独で登ると云うので、亡。雪崩に巻き込まれた者、59名、死亡、行方不明18名の大量遭難であつた。

32年5月26日、富岡市役所山岳部、丸岡君は、魚沼三山縦走の途中、越後駒ヶ岳付近にて滑落死亡。桐生、伊勢崎、岳連東毛地区出動。41年9月11日、藤岡高校生四名は、谷川岳一の倉沢4ルンゼを登攀中、F1を登りきり、悪天のなかでババーク中、一年生の戸丸君は疲労凍死。他の2名を残し、上級生の萩原君が肩の小屋迄連絡に行くことが出来ず、不明となる。ビバーク地点に転落死、登攀中、松井山岳会が救出する。45年2月11日、藤岡女子高校、長谷川、石沢さんは、裏山山麓沢にて転落死亡、自衛隊へり出動。42年1月1日、高崎山岳会、小池、エさんは、利根川源流越後コボラ沢出合付近にて、雪渓崩壊のため死亡、松井山岳会、奥根山岳会、出合にて発見される。8月10日、前橋OB会、狩野、安原君は、谷川岳一の倉沢4ルンゼを登攀中、5ルンゼの頭付近で雪庇を踏み抜き、瀧沢側に転落死亡、岳連東毛地区出動、8月に発見される。51年12月31日、伊勢崎山岳会、栗原君は、北ア奥穂高岳山頂付近で雪庇を踏み抜き、瀧沢側に転落死亡、岳連東毛地区出動、8月に発見される。

7月30日、群馬独峰会、佐藤君は、谷川岳一の倉沢山頂を単独登攀中、転落死亡。一の倉沢最悪と云われた麓立岩も、新しいルートで登りつづけられ、より困難な単独登攀で登られる様になり、前後して5名が単独登攀中、転落死した。43年8月25日、桐生山岳会、大岡、馬坂両君と、桐生あるこう会、佐藤、治田両君の計4名は、谷川岳一の倉沢滝沢第1スラップを登攀中、国境稜線にて倉林君は疲労凍死、外2名が凍傷のため助けなくなり、雪水クラブの人達により救助された。自衛隊へり出動。50年1月4日、鶴翔山岳会上越支部、石川、関根、今城の3君は、谷川岳一の倉沢滝沢リッジを登り、稜線直下、サポーター隊の目の前で、雪渓崩壊のため転落死亡。此の年は降雪が多く、9月8日、二の沢出合にて発見される。

同日、太田山岳会、森尻君は、北ア明神岳東麓、上宮川谷にて、雪崩のため死亡、5月発見される。森尻君は1人後発し、追いつこうとして事故に合う。同日、境町山の会、リッダー権名君ら8名は、北ア穂高岳瀧沢ヒュッテの小屋の間に幕営中、北尾根よりの雪崩にて全員埋没、5月発見。此の北アの事故には、群馬岳連より伊勢崎、松井山岳会、登高会など出動、尚、境町山の会の8名死亡は、38年1月、北ア薬師岳の愛知大学の13名に次ぐ、大量遭難。2月19日、藤岡工業高校教諭、篠原親子は、天神平でのスキーの後、田尻沢を滑降中雪崩にて死亡。この事故により、田尻沢のスキー滑降は禁止となるが、建前だけにな

つてしまい、守られてはいない。48年7月11日、高崎山岳会、茂木君は、谷川岳一の倉沢山頂を単独登攀中、中央稜を下降中転落死亡、高崎地区協議会員出動。48年11月4日、群馬山岳会、佐藤君は、谷川岳一の倉沢4ルンゼを登攀中転落、夜間での救助活動中死亡。49年12月20日、群馬山岳会、7名は、谷川岳一の倉沢滝沢リッジを登攀中、国境稜線にて倉林君は疲労凍死、外2名が凍傷のため助けなくなり、雪水クラブの人達により救助された。自衛隊へり出動。50年1月4日、鶴翔山岳会上越支部、石川、関根、今城の3君は、谷川岳一の倉沢滝沢リッジを登り、稜線直下、サポーター隊の目の前で、雪渓崩壊のため転落死亡。此の年は降雪が多く、9月8日、二の沢出合にて発見される。

は、3000米の稜線上でも、雨一の年令、等などである。

のため、雪が氷状コンクリート化され、スリップ事故が続発した。第二次群馬ヒマラヤ登山隊も、訓練のために入った槍沢赤岩より槍ヶ岳のコース中で、遭難の続発に出くわし救助にあった。

9月23日 第二次群馬ヒマラヤ登山隊(タウラギリI峰)に参加した、阿久沢(登高会)、深沢(大間々)、小林(ミヤマ)の3名は南東稜C4-C5間にて面発生時の表層雪崩のため死亡。

10月20日、同登山隊、副隊長小暮（境町）君は、C4付近にて転落死亡、同隊は四名死亡者を出す。

55年5月2日、日本山岳会チヨモランマ登山隊に参加の宇部（鵬翔君は、北壁ホーバイン、クローアール内にて、雪崩のため死亡。

57年8月1日、鵬翔山岳会、小池君は、会の合同合宿に参加、北ア黒部川鳴沢にて、鉄砲水のため死亡、此の合宿に参加の6名も、此の鉄砲水で鳴沢の岩小屋にて流され、死亡する。

59年9月1日、群馬登高会、小林さんは、ヨーロッパ・アルプス・モンブラン山群・ベニ・ニュ・針峰に登攀中、落石に当たり、転落死亡。これ以外にも、高崎女子高生の万座温泉でのガス中毒死や、山菜、山草採りなど登山を目的としないものもあるがこれは除外した。

クロニクルよりの考察
クロニクルを書いて見て、遭難
事故を幾つかに分けて、考えて見
ることが出来る。年代、場所、季
節、原因、事故者の年齢、リータ

昭和三十年代は、やはり登山ブ
隊組織作りの必要性を痛感する。

ムである。山岳地に向う土曜日の夜行列車ともなれば、どれも満員で、そのほとんどが登山者であった。五月の連休の谷川岳の各沢の出合は、テント村となり、道を結集しようと、理事会の会議

歩くのにも張り綱などに気を使う程だった。事故も初歩的なミスによるものが多く、ルートも判らず人の後に付いていて、雪溪をスリッパしたり、岩場より転落したり、技術的にも未熟が目立つ。

四十年代の事故は、県内谷川の危険地区内が多い。雑誌やガドブック等がルートの説明を掲げるようになり、各山岳会の先鋭も、新しいルートや困難なルー

私達群馬県も、登山者を受け入れる側であつたので、連日の事故に、地元の遭難対策班の出動も、も多かつた。

大変であったことは言うまでもない。昭和四十年、谷川岳の登山条例発足後は、春の良いシーズンも登れなくなり、この季節の谷川岳フカズ、ヒマラヤ遠征等である。

からは、登山者の姿は少なくなつて来た。群馬岳連の各山岳会の合宿も、南・北アルプスや八ヶ岳の合宿が増えて来たのである。

四十一年岳連理事であった須田淑人氏により、初めての冬山合宿

新ルート、より困難なルート
らの登頂が目的の遠征隊は、や
り事故の確率が高い。初期の海
登山は、高度順化や計画面での
験不足の感があつたと私は思
事故原因の中で、転(滑)落

検討会が、岳連内で行われた。これは県外の3000米の冬山での合宿が増えているのに、経験者が少なかったことに対応して、皆で話しあっておきないあうためにはじめられたのである。しかし、四十二年の正月は、群馬岳連内だけで三件、十一名の死亡者を出してしまった。この年、日山協より中野満氏を招き、遭難の防止と対策の講演をしてもらう。その中で岳連内の救助体制を指摘される。

四十三年、一の倉沢滝沢スラブ

二十五名、雪によるもの(雪崩雪庇踏破、雪稜崩壊)が二十五名と大半をしめる。岩場などの転落事故の始末は、割合短時間で終するが、積雪期での事故の場合、半年近くも長引くことが多く、冬山遭難が、家庭や社会に及ぼす影響は、非常に大きいものである。

冬山遭難の場合、リーダーの命令にも注意したい。年をとった者が皆、テランではないが、冬山千米での合宿を行うには、リーダーは、冬山シーズンぐらいの

二千米をとび越し、三千米に入る

人達が多くなったが、やはり地元の良い山に登られる様を中から、次のステップに移りたい。日本の冬山、特に正月登山は、ヒマラヤよりも難しいときがある。一番天

候の安定しない時に、限られた日数で登らなければならない、また山岳会に入会して二三年目で事故を起す人が多い。この時期が、一番山行に熱が入り、動けるからであらう。やはり会のリーダーは

この時期の人達の山行管理を忘れてはならない。

冬山のベテランとは、私流に考

えれば、冬の稜線での経験が三十日以上なければならぬと思う。稜線に出るには、深雪のラッセルもあり、又頂稜には、氷化した所

でのアイゼンテックもいる。強風の中で生活技術等、総合的なものが要求されるからだ。冬山を三十年続けたとしても、日本の山全部のアドバースなど、とても出来ないだろう。しかし、岳連内

でも冬の穂高岳や剣岳など、それぞれの山域に、すぐれた経験者を持つようになって来た。又、用具や食糧、計画なども、超高所での経験を生かして、色々と合宿などのアドバイスが出来るエキスパート達も多くなった。これらの人達がプロジェクトを作り、合宿検讨会などで相談にのることも必要なのではないか。四十一年から続いた検讨会もマンネリ化から脱皮する考えも持つべきだ。

クロニクルにはないが、最近、

中高年の事故が増えつつある。妙義山だけでも、年間二―四名が亡くなっている。これらの対策も、早急に必要であろう。

クロニクルより私的な考察をしてみたが、山登りを続ける人達の遭難に対する意識を少しでも高め

ることが出来れば幸いである。

岳連隊アンナブルナへ再挑戦
一九八四年、八十五年の群馬県
山岳連盟冬期アンナブルナ一峰登

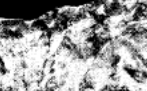
山隊は、無念にも失敗に終つてしまひました。

今年はいよいよその雪辱を果す

年となりました。その後失敗の原因等についてあらゆる面で検討を加え、細部について分折し、反省してまいりました。ある者はエベ

レストに、又国内での冬期登攀に
と努力を重ねています。

一九八五年、八六年のブルガリ
ア隊、一九八六年、八七年のスイ
ス隊の敗退を見てもこの遠征計画
は決して容易なことではありませ



んが、これ等の反省等が生かせれば必ず登頂出来ると確信する。今

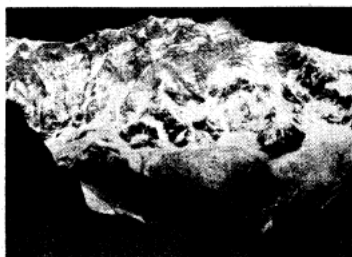
現在ではまだ隊員が決定していませんので又、改めて皆さんに報告を行こなう予定ですが、ここに簡単な計画の説明を致します。

隊員は約十二名、シエルバについては今冬マカルーへ行った山田昇が強力な八名のシエルバを手配

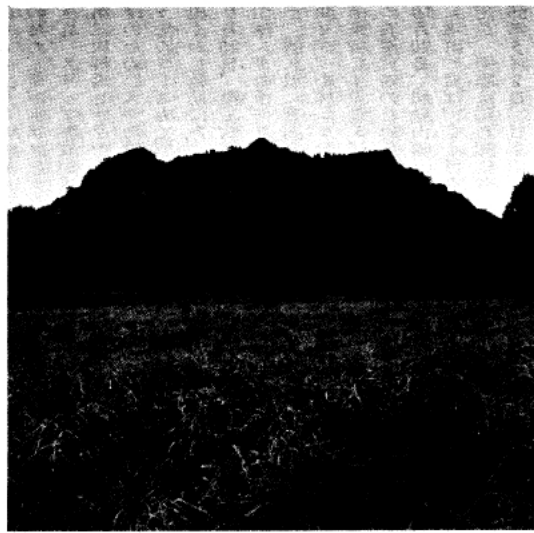
日本出発は一〇月中旬になり、現地での仕事を済せ、十一月早々にキャラバン開始となり、前回はポーターの不足などで苦戦してい

ますので今回は一日間の日程を取っています。ベースキャンプは前回と同じ四二〇〇米に建設し、前回登山の経験から天候を考慮すると速攻登山が必要のため、充分な高所順応トレーニングをして、ネパールの登山規則により、政府冬期登山開始日の十二月一日より登山を開始致します。

ルートは前回同様イギリスルート、C・1は、旧C・1の上のアイスフォールの中で五一〇〇米付近に、そしてそのアイスフォールを抜けてヤセ尾根に取り付き、旧C・2を越え、登りつめた所のプラトー六〇〇〇米付近にC・2を建設する予定、ここは場所の良い所でイギリス隊のC・3地点です。ここから尾根の左側を大きくトラバースしてクローアルの大氷壁に取り付き、左側のナイフリッジに上り、旧C・3を越えて大岩壁基部の六七五〇米付近にC・3を予定しております。ここから先が核心部の登攀となり、トラバース気味に右上へ登って行くと旧C・



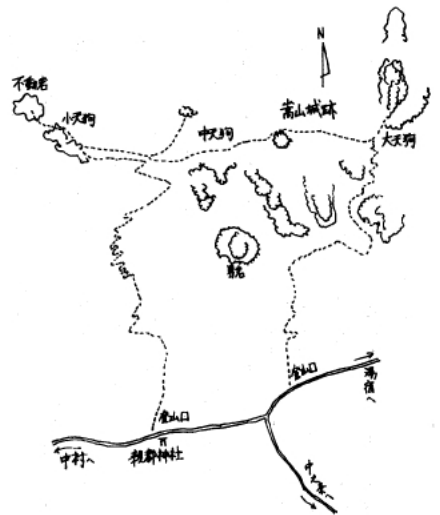
ラト六〇〇米付近にC・2を建設する予定、ここは場所の良い所でイギリス隊のC・3地点です。ここから尾根の左側を大きく下るパスを通りクリアールの大永壁に取り付き、左側のナイフツジに上り、旧C・3を越して大岩壁基部の六七五〇米付近にC・3を予定しております。ここから先が核心部の登攀となり、トラバース気味に右上へ登って行くと旧C・



吾妻八景の一つで山頂からの遠望は素晴らしい。戦国時代の昔、斎藤城虎丸の居城がここにあり、山中にはこの落城に伴う、数々の悲話、哀史を秘めた多くの伝説、

＝ かくされた山 ② ＝ 嵩 山 中之条山の会

史跡、名勝があり一日の行楽には最適地である。標高七八九メートルで、山頂には大天狗、小天狗の岩峰があり、白根山、四阿山、浅間など上信越国境の山々が展望出来る。JR中之条駅で下車、吾妻観光中之条伊参行循環バスに乗り親都神社前で降りると登山口である。自家用車の場合は、県道中之条湯宿線で中之条町役場から、湯宿方面へ向い五分位行くと、三叉路がありその所が親都神社で登山口である。左右二つの登山口があるが、ここでは左から登り、右に降りるコースを、紹介しよう。まず親都神社で参拝をすませ、前の道路を横切り左の登山口から入ってすぐの大岩から、一番観音がある。ここから山中に三十三番までの、観音様が安置されて居り観音様すべてを廻ってみるのも面白いと思う。なお三十三番の観音様は、



斎藤氏落城の時に一族婦女子、子麗の親都神社の大けやきは、胴回供までも自決して果てたといわれる。その霊を慰めるために空閑と言う僧と地域の人々と、近隣の村人によって建立された。二十分位登ると小天狗に着きそこから、中天狗を経て大天狗まで十分で行ける。ここが嶺山の頂上である。下山は大天狗から登った道を元に、五分位戻ると経塚がありここを下へ降りると、十五分位で神社前スや谷川岳の岩登りや縦走を行っている三十三番観音像をはじめ、胎内くりに、御城の平、経塚、骨穴一升水など、普段では味わえないハイキングを楽しむことが出来る。なお、男岩、女岩、扇岩(仮称)などいくつかの岩登りのグレンデとなつてはいるが、全体に岩がもろく人工ルートが多いので、支点を良く確認して登ってほしい。毎年春、秋二回城跡で祭が行われるが、特に五月五日の嵩山まつりは、数千人の人出で賑う。

「中之条山の会」の紹介

「山が好き」そんな仲間達が集まり昭和四十七年四月創立、いつの間にか十五年が経ち現在の会員数二十五名。会の活動はいつでも気軽にに行ける奥山のハイキングから北アルプスや谷川岳の岩登りや縦走を行っている三十三番観音像をはじめ、胎内くりに、御城の平、経塚、骨穴一升水など、普段では味わえないハイキングを楽しむことが出来る。なお、男岩、女岩、扇岩(仮称)などいくつかの岩登りのグレンデとなつてはいるが、全体に岩がもろく人工ルートが多いので、支点を良く確認して登ってほしい。毎年春、秋二回城跡で祭が行われるが、特に五月五日の嵩山まつりは、数千人の人出で賑う。



ヨーロッパやヒマラヤへのユメをいだき、今後も地域の山岳会として地味な活動を続けていきたいと思つてゐる。

事務所
中之条町中之条九四九の三
長谷川商店内 会長 長谷川勇
文責 剣持英司

雪上生活技術講習会報告

指導委員会では去る、三月八日天神平に於いて、雪上生活技術講習会を行いました。

昨日からの雪が朝まで降り続くとと思われたが、朝まだ夜の明けきらない内に、雪はやんでいたが路面はすっかり凍っていた。

四輪駆動の威力で土合までスムーズに行く事が出来た。

天気は次第に回復して絶好の登山日和となつたが、ロープウェー駅には顔見知りの人達は見えなかった。

すでに来ている人達もいると思ひ、天神平山頂へ向かう。いつもの講習場所まで登るとすでに高経大の人達が待っていた。

しばらくすると前橋山岳会と、伊勢崎山岳会の人達も登つて来た。総勢十四名で(内指導員三名)まず雪洞の掘り方を三班に分けて行なう。

連対部救助訓練

四月十八日夜、妙義湖畔管理棟にて親睦会を開催。

新隊員をはじめ、谷川岳警備隊、松井山岳会、及び岳連副会長の小林氏、松井山岳会会長小坂橋氏の両氏も参加。

翌十九日は妙義ロックガーデンにて、新隊員の訓練及び、谷川岳警備隊、松井山岳会救助隊の合同訓練を左記要領にて実施した。

一、工作隊、搬出隊と分かれ張込みクロス方式の搬出

二、ワインチンによる巻上げデスクリによる救出

三、西山隊長による石や木からの支点的取りかた。

そのあと管理棟にてミーティング午後五時無事終了。

文責 須田

天気の良いので汗びっしょりとなり四十五分ほどで完成した。

少々遅いペースであるが女性も入っていたので良い訓練となつた。昼食後は皆なでイグルーを作る事とし、ブロックの切出しから始める。初めての人が多かったのでブロックの切出しに時間がかかった。二時頃には立派なイグルーが出来あがり、上に乗つたりして皆、楽しんでゐた。今後はスキー登山をしながら雪洞や、イグルーを作る講習会を行なつて行きたいと思つておりますので、多数の参加を希望致します。

六二年度指導委員会行事予定

五月十七日 雪上技術講習会 (マチガ沢)

六月十四日 岩登り講習会 (黒岩)

九月十三日 ロックフレイシテバル (黒岩)

八月二十六日 天気図講習会 (休協)

二月七日 氷壁技術講習会 (吾妻溪谷)

三月十二日 雪上生活技術及びスキー登山講習会 (尾瀬)

文責 竹山繁男

高崎山岳会 新井邦光

大山洋次

星野久男

小暮文彦

境山ノ会

山口英男

木村幸一

伊勢崎山岳会

長岡均

松井山岳会

茂木稔

群馬独峰会

神田敏幸

横井義男

前橋山岳会

佐藤光由

小林俊之

弥野光一

群馬ミヤマ山岳会

原沢幸雄

清水裕干

群馬むすびの会

郷間一男

須田章彦

群馬登山会

西山利秋

加藤恒夫

見城正造